

## 犬を連れたピルグリム

——犬の表象からひもとく『士官と紳士』と古典文学の結びつき

有為楠 香

### I. 序

イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) (1903-66) の『士官と紳士』 (*Officers and Gentlemen*) (1955) は、後に大戦三部作『名誉の剣』 (*the Sword of Honour trilogy*) (1965) としてまとめられた三つの長編小説のうち、第二部にあたる作品である。『名誉の剣』はイギリスが第二次大戦の火中に身を投じた、1939年から1945年にわたる約六年間を取り扱っている。第一次大戦の後、実際の戦場に出たことのない世代である陽気な若者たち (*Bright Young Things*) の旗手として作家デビューしたウォーであったが、次の第二次大戦において現実に兵員として前線に赴いたことは、彼の作品における戦争描写に大きな影響を与えた。戦争を対立する陣営間の喜劇的騒動としてとらえる初期作品の特色は弱まり、味方陣営内での競合・官僚主義・精神の荒廃など、戦争という現象をより社会的にとらえた見方が、第二次大戦後のウォーの作品には強まっていく。『名誉の剣』はその集大成であり、ウォーの思想、とりわけ戦争観を考察する上で中心となる大著である。

第一部『戦士たち』 (*Men at Arms*) (1952) は、1939年8月に独ソ不可侵条約が結ばれたことをきっかけに、イギリス陸軍に入隊する意志を固めた主人公のガイ・クラウチバック (Guy Crouchback) が、翌年アフリカのダカール (Dakar) で小戦闘を行った結果、イギリス本国に送還されるまでを描いている。第二部『士官と紳士』では、新たにスコットランドに駐屯しているコマンド部隊に配属されたガイが、中東からエジプトを経てクレタ島

(Crete) の大規模な戦闘に参加した後、1941年6月のソ連による連合国との同盟成立を知り、再びイギリスに帰国するまでが描かれる。そして第三部『無条件降伏』(Unconditional Surrender) (1961) では、1943年以降、銃後へと活動の場を移したガイがイギリスを三たび離れ、今度はユーゴスラビアでユダヤ人難民を解放するための政治折衝を行い、終戦を迎えるまでの様子が書かれている。このように『名誉の剣』は各部ごとに、アフリカ大陸から東欧にまでわたる戦場で、さまざまな体験をしては祖国に帰還するガイの物語が語られる。その体験の多くは、第一次大戦に出征していないため、戦争というものに夢想を投影しがちだったガイを孤独と幻滅に追いやるが、逆にその幻滅によってガイはより現実的な、信仰を重んずる者として生きる道を見つけていく。それが、『名誉の剣』にウォーが与えた道行きである。

本論で取り上げる『士官と紳士』では、第二次大戦半ばの1941年5月に実際に行われた「クレタ島の戦い」が山場となる。史実におけるこの戦いで、ドイツ空軍は戦闘機とパラシュート部隊の猛攻による大空襲を行い、約十日間に渡る激しい戦闘の末、クレタ島を守備していたイギリス軍と民兵は降伏した。降伏に際しては一万人以上のイギリス兵士が捕虜となったが、その前に一刻も早く島から脱出しようとする将兵たちの混乱も酸鼻を極めたのである。<sup>1</sup>そして作者ウォー自身がこのとき、イギリス陸軍の一員として、この時期のクレタ島に配属されていたことも、この作品の読解に欠かせない要素である。『士官と紳士』におけるドイツ軍の空襲と、疲弊しきったイギリス軍の様子、および島からの脱出に関する多くの場面は、ウォーの執筆した戦場日記が元になっている。ウォーが実際に体験した事実と、『士官と紳士』内の描写の摺り合わせについてはいくつかの研究がある。例えばドナート・ギャラハー (Donat Gallagher) は、ウォーの戦場日記を元にし、現実にはウォーの部隊がクレタ島で取った行動と『士官と紳士』との相関性を、日時を併記しつつ詳しく記載している (Gallagher 177-90)。

同時にクレタ島とは、ギリシア神話において有名な迷宮 (ラビリンス) を

擁する土地である。したがって『士官と紳士』には多くのギリシア・ローマ文学からの引用と思われるエピソードが登場し、現代の世相を表現する際に古典を応用するウォーの手法が活かされている。『士官と紳士』におけるこの手法について、アーチャー・K・ロス (Archie K. Loss) は以下のように分析している。

Like Charles Ryder in *Brideshead Revisited*, Guy ends by kindling the flame of hope at the altar of religion, and the novels that tell his story take their place with other major works of modern literature in which classical epic and myth serve to reinforce the emptiness of modern experience—the work of Eliot, of Pound, and of Joyce. (55)

つまり、モダニズム作家であるエリオット、パウンド、ジョイスらが行ったような、古典の物語と現代人の生活を重ねることで現代社会の空虚さを浮かび上がらせる文学的手法は、次世代作家のウォーにおいても継承されているということである。本論でもその手法を重んじる形で分析を行う。

一般にクレタ島という場所、そして迷宮と化した戦場との連想に関し、いちばん直接的な象徴と考えられるものは牛のミノタウロス (Minotaur) であろう。だがウォーがそのまま作品内に牛を登場させたシーンは、『士官と紳士』の中にはほとんどない。<sup>2</sup> 実際、作品中により多く登場する動物は犬である。『士官と紳士』における犬と、それに擬せられた人物の分析は、ジェフリー・ヒース (Jeffrey Heath) が行っている。ただし、ヒースは登場人物を犬と関連づけることによって人物の分析を行っているものの、犬と登場人物たちの関連を古典の神話の世界に当てはめて考察しているわけではない。<sup>3</sup> 『士官と紳士』では、実際に生きている存在から象徴として連想されるものまで、多岐に及ぶ形で犬がガイの周囲に現れる。それらの犬の描写

は、実際のギリシア・ローマ文学から引用されたエピソードと組み合わせられることで、さらに重層的にガイの現実的／神話的立ち位置を構築していくのである。

本論では、神話や古典を背景とした特徴的な犬の表象に着目し、それがクレタ島における主人公ガイの行動と役割を明確に裏付けるものであることを指摘する。なぜならそれらの表象は、先にも述べた現代の世相を表現するのに古典文学を応用するという文学的手法において、牛よりも強力にガイとクレタ島との関わりを示していると考えられるからである。その上で最終的にこの分析を、ウォーの作品が初期から一貫して特色としている世相風刺の描写と照らし合わせることで、ウォーが『士官と紳士』を三部作の中でどのような位置に置いているのかを明らかにする。

## II. 二人のスキュラ——スコットランドのガイ

まず、犬を伴って現れる人物が、ホメロス (Homer) の『オデュッセイア』 (*The Odyssey*) とオヴィディウス (Ovid) の『変身物語』 (*Metamorphoses*) の二つにまたがる連想を導く様を検討する。『オデュッセイア』に登場する女怪スキュラの姿、また『変身物語』における王女スキュラのエピソードは、犬に関連する形でスコットランドでのガイをめぐるストーリーに絡み、またその後のクレタ島におけるガイの立ち位置を規定すると考える。

『士官と紳士』において最初に犬と共に現れるのは、ガイの実父であるクラウチバック氏 (Mr. Crouchback) とその愛犬である。クラウチバック氏は大邸宅を競売にかけた後、浜辺の街に移り住んで悠々自適のホテル生活を送るカトリックの紳士である。クラウチバック氏がホテルでも常に大きなラブラドル・レトリバーと一緒に暮らしていることは、前作の『戦士たち』からすでに記されているが、『士官と紳士』では一セクション全体で、そのホテルにおける、戦争に直接関わらない市民達の描写がなされる。クラ

ウチバック氏はアメリカに疎開している孫達から小包を受け取ると、その中に入っている見慣れないアメリカの食料品を、ホテルに同泊している客人に尋ねながら、犬が食べてもいいものかどうか仕分けする。ガイのいる場面で戦時の殺伐とした心理描写が続く中、市民であるクラウチバック氏が犬に寄せる愛情は、読者にひとときの安らぎと共に、「英国紳士と犬」の暖かな関係を印象づける。

だがその情愛あふれる描写は、次に現れる第二の「老人と犬」の組み合わせを導くための布石であることがわかる。『士官と紳士』にて、ガイは新たに組織されたコマンド部隊が駐屯する、スコットランドにある架空の島、マッグ島 (Isle Mugg) に赴く。その島を治める領主に、ガイは同僚とディナーに招かれる。そのディナーの席に領主と彼の妻が六頭の犬を引き連れて登場する様子が、次の描写である。

Six dogs, ranging in size from a couple of deerhounds to an almost hairless Pomeranian, gave tongue in inverse proportion to their size. . . . Presently the piper, too, was hushed and in the stunning silence an aged lady and gentleman emerged through the smoke. (sic) (288)

このとき重要なのは、六頭とはっきり限定されている犬の数である。吠え立てる六頭の犬を足元に従える姿は、正面にいるガイから見れば下半身に犬の頭を寄せ集めた外見となり、それはホメロスの『オデュッセイア』に登場する、女怪スキュラ (Scylla) を彷彿とさせる。スキュラは『オデュッセイア』にて “Her [Scylla’s] legs – and there are twelve – are like great tentacles, unjointed, and upon her serpent necks are borne six heads like nightmares of ferocity, with triple serried rows of fangs ad deep gullets of black death” (Homer 212) と描写されているとおり、牙をむく六頭の犬の

頭を下半身から触手のように突き出す海の怪物である。この領主は城内の火薬庫に無数の火器と弾薬を収蔵する爆薬マニアの老人であり、さらにマッグ島はスコットランドの高地を愛するロマン派のヴィクトリア朝詩人たちからさえ、その名前の韻の踏みにくさのために無視され続けてきた場所である(274)。そのような孤島のエキセントリックな主になぞらえるには、スキュラの姿はふさわしいと考えられる。

また同時に、このスキュラという名前は、オヴィディウスの『変身物語』第八編(Ovid 179-83)に描かれたもう一人のスキュラという女性を連想させる。こちらのスキュラは怪物ではなく、メガラ(Megara)という小国の王女である。スキュラの王国メガラはクレタ島のミノス王(Minos)に侵攻されるが、彼女は自国にやって来たミノスを見るやいなや恋をしてしまう。スキュラはミノスの侵略を成功させるべく、眠っている父王の髪の毛を一房切り取り、それを愛のしるしとしてミノスの天幕に持参したものの、王族らしからぬその振る舞いに嫌悪を覚えたミノスは、侵攻そのものを取りやめてクレタ島へと帰還する。恥をかかされ祖国にも戻れないスキュラは最終的に海鳥に変身して彼方へ飛び去るというのが、『変身物語』におけるスキュラのエピソードである。要約すると、「自国を裏切ろうとした高貴な女性が、それを聞かされた男にすげなくされる」という物語であり、それは次のように『士官と紳士』で翻案される。

犬をつれた領主のゲストとして食卓についたガイの隣に、領主の親族である娘のケイティ・カーマイケル(Katie Carmichael)が話しかける。外見も言動もかなりエキセントリックなケイティは、最初からガイに常軌を逸しているのではないかという不安を抱かせるが、それは彼女がテーブルクロスに走り書きする“POLLITICAL PRISONER”(sic)(293)という単語でより深まる。生まれも名字も生粋のスコットランド人であることを主張する彼女は、食事の最中もイギリスを誇り続け、最後には“*When the Germans land in Scotland, the glens will be full of marching men come to greet them,*

and the professors themselves at the universities will seize the towns” (sic) (294) とまで口走り、領主夫妻に咎められる。一方で彼女は何かガイを気に入り、食事中にも思わせぶりな態度を取った後、彼の自動車に密かに、イギリスの敗北を願うアジビラの束を入れる。

小さな場面ではあるが、このくだりには1930年代のスコットランドの政治状況が反映されている。第一次大戦後に人口の減少と社会問題が悪化し、イギリスの中央政府から特別指定区扱いされていたスコットランドは、第二次大戦を機にナショナリズムの勃興を迎えていた（ミスチン 201-03）。二十歳前後のケイティはその運動に影響を受けており、わざとガイ達イギリス陸軍兵士の前でドイツ軍を称揚している、ということが暗に示されている。そしてガイは領主の館から戻った翌朝、ケイティが忍ばせたビラの束を運転手から渡され、それを手に持って歩き始めた際、宿舎の階段でつまずいてしまう。王女スキュラの物語との類似性が見られるのはこのシーンである。

He[Guy] dropped the papers, breaking the frail bond of knitting-wool which held them together and saved himself from falling only by clutching at the departing driver. A great gust of wind came as they stood embracing and bore away the treasonable documents, scattering them high in the darkness. (297)

転んだところを部下に抱きとめられたガイが、手に持っていたビラの束を風に吹き飛ばされてしまうこの場面では、ケイティが使用した毛糸がスキュラの父の髪の毛、風に舞って飛び去る書類がスキュラの変身した鳥を連想させる。しかも、これ以降ケイティが物語に登場することはなく、ガイもまた彼女に特別な感情を覚えることなしにクレタ島へと旅立つのである。その経緯も、『変身物語』でのスキュラとミノスの顛末を思い起こさせる。

このように、スコットランドのマッグ島における犬は、ガイにとっては故

国イギリスでのような家庭的な関わりではなく、神話に登場する怪物のごとく奇怪な連想の繋がりにおいて描かれるのであり、ガイを以後待ち受ける苦難の予兆と見ることもできる。さらにそこに介在する二人のスキュラ、女怪から王女に変わるスキュラにまつわるエピソードの翻案の中には、ガイがミノス王に置き換えられているという重要な見立てが隠されている。この見立てでは、小説後半のクレタ島の戦いにおいて大きな意味を持つことになる。次の章では、平時のスコットランドから場所を移し、戦場であるクレタ島における犬の表象という点からガイの物語に考察を加える。

### Ⅲ. ケルベロス—クレタ島のガイ

『士官と紳士』のBOOK 2から、ガイを含めたコマンド部隊はいよいよ激戦地のクレタ島へと派遣される。これより前からガイの部隊には三人の同僚が現れ、彼らの存在はクレタ島においてますます重要度を増す。特徴的なのは、その三人がそれぞれ犬に関わる人物造形を秘めているということである。その三人を犬との関連において分析する。

一人目はアイヴァー・クレア (Ivor Clair) という男で、ガイがスコットランドに赴任した直後に初めて宿舎で出会い、声を交わした同僚である。訓練中に負傷して休んでいたクレアは、ターバンをかぶり、金の縫い取りをしたスリッパを履いて、トルコ絨毯を敷いたソファに寝そべるなど、“The pictorial effect was of a young prince of the Near East in his grand divan in the early years of the century” (276) と描写されるほどに優雅かつ退廃的な姿である。その傍らには白いペキニーズがおり、クレアは目に入れても痛くないほどこの飼い犬を溺愛している。クレアは常日頃から絹のハンカチでこの犬の顔をぬぐってやり (278)、戦地に赴く命令が出たときには自分の荷物詰めよりもペキニーズを安全に実家に送る方に時間を注ぐ愛犬家だと描写される (312)。



この男とガイは、実は戦前にロンドンで同じ社交クラブに属しており、先に述べたような、デカダンとも言えるオリエンタリズムを秘めたクレアの美しさ、同時に生粋の英国紳士の優雅さ、そして馬術選手としてのスポーツマンシップに魅了されたガイは、以下のように彼を「ヒトラーには得ることのできないイギリスの華」と見なし、親交を深めるにつれて敬愛の念を捧げるようになる。

Guy remembered Claire as he first saw him in the Roman spring in the afternoon sunlight amid the embossing cypresses of the Borghese Gardens, putting his horse faultlessly over the jumps, concentrated as a man in prayer. Ivor Claire, Guy thought, was the fine flower of them all. He was quintessential England, the man Hitler had not taken into account, Guy thought. (342)

このように愛犬家クレアは見かけのイギリス精神をもってガイを幻惑する。しかし後になって彼の人間性は犬にも劣ることが暴露される。

二人目のハウンド少佐 (Major Hound) は、名前からして犬との関連性が高い男である。ハウンドはスコットランドを出たガイ達が一旦エジプトに駐留したときに合流する。そのときのハウンドの役割は、軍に忠誠を誓う叩き上げの軍人であるが、やや知性に欠けるコメディ・リリーフである。しかしクレタ島に到着後のある出来事により、彼の人格は崩壊する。

ハウンドは度重なる空襲のストレス、慢性的睡眠不足、食糧不足による朦朧状態から徐々に狂気に至る中、ガイたち大勢の兵士の見ている前で、部下に食糧をねだらうとしてしまう。思いとどまって士官のプライドを保つか、一兵卒から餌をもらう犬に成り下がるかの分かれ道に立つハウンドを、ウォーは冷徹に、試練の瞬間にいたのだと書く。

Not Guy or the ragged, unshaven Sergeant, not Fido [Major Hound] himself who was dizzy with hunger and lack of sleep, nor anyone on that fragrant hillside could know that this was the moment of probation. Fido stood at the parting of the ways. Behind him lay a life of blameless professional progress; before him the proverbial alternatives: the steep path of duty and the heady precipice of sensual appetite. It was the first great temptation of Fido's life. He fell. (405)

新約聖書で荒野のキリストが悪魔に誘惑されたように、ハウンドは、軍人の矜持を保つか、卑しく食欲に屈するかどうかを決定させられることになる。だが結局ハウンドはキリストのように誘惑を退けることはできず、わずかばかりの食糧と引き換えにその場にいた者全員から蔑まれ、またこれからの自尊心をも捨てるを得ない、獣の道を選んでしまう。それを如実に示すが、ファイド (Fido) という彼のあだ名である。

ハウンドは以前、ガイに自分のことをファイドと呼んでほしいと言ったことがあった。一瞬めんくらったガイは“Philo?” (404) と聞き返すが、愛という意味のファイロでなく犬によくつける名前のファイドであると本人が認めたときから、『士官と紳士』の文中でハウンドとファイドの名は混交され始める。ハウンドはいつしか語りの中でもファイドとしか呼ばれなくなり、普段の挙動も“Fido raised his muzzle” (416), “His tail was right down” (416) と、動作が犬に例えられたものしかなくなっていく。このように、じわじわと本人にも気づかないところで人間が人間でなくなっていき、気がつけば獣になっているという恐怖譚は、さながら『変身物語』を彷彿とさせる。

犬と関連する三人目は、クレアの元部下であるルドヴィク伍長 (Corporal-Major Ludvic) である。ルドヴィクもまた、スコットランドを出てからエ

ジプトでガイの隊に加わる男である。彼はクレタ島でガイの指揮下に配属されるが、途中で密かに隊を抜け出して、すでに発狂して逃亡していたハウンドを秘密裏に射殺し、再びガイの元に戻ってくる。その理由は単純で、彼の頭にあるのはこの激戦区から脱出することのみだからである。ルドヴィクは心神喪失して役に立たなくなった上官ハウンドを殺し、ガイの下で島を出ようと企む。犬のように忠実にガイに付き従うルドヴィクは、共にボートで島を出てからは漂流中に他の乗組員を全員海に突き落とし(457-58)、ガイと二人きりでエジプトまで流れ着いた後に姿を消す。また三部作の最終部にて、空軍パラシュート部隊訓練校の校長になってからは、元上官のクレアに倣って飼いだめたペキニーズに、自分が殺したハウンドのあだ名「ファイド」をつける。こういった行為に見いだされる彼の忠義と裏返しの残忍さは、どこまでも追ってくる犬のようにガイに絡みついていく。<sup>4</sup>

このような犬のイメージを持つ三人と共に、ガイはクレタ島に赴くことになる。前章で述べたガイ＝ミノス王という見立て、そこに三人の犬に似た人物が加わったとき、神話のミノス王の役割をここで再検討する必要性が生じる。

ホメロスの『オデュッセイア』によれば、死後に地獄に落ちたミノスは死者を裁く審問官となる(Homer 204)。そして地獄にいる犬と言えば、三つの頭を持つことで有名なケルベロス(Cerberus)であり、ミノスがその犬と共にあることはヴェルギリウス(Virgil)の『アエネイド』(*The Aeneid*)第六編(Virgil 158-59)にも記されている。よってガイとその周囲の、三人の犬に関連する軍人たちをこの図にあてはめてみると、ガイ＝ミノス王の繋がりやクレタ島においても引き継がれていることがわかる。つまりスコットランドにおけるガイが生前のミノスと重ねられていたのに対し、クレタ島のガイは死後のミノスになぞらえられていることになる。

とすれば、地獄のミノスの生業である、人を裁く審問官としての役割をガイが果たすことができるのかどうか、ここが『士官と紳士』におけるガイの

最終試練と読むことができる。

#### IV. 審問官ミノス—脱出後のガイ

審問官たるガイの最終試練の試験紙となるのは、上に述べたクレアである。この章では、三人の同僚の中でも、とりわけガイの中で英国紳士の魂のごとく偶像化されていたクレアの行動が、ガイに現代における紳士のありさまを突きつける事態について考察する。

クレタ島の総司令部から、ガイ達の属する攻撃隊は、他の部隊の脱出を見届けた後にドイツ軍の捕虜となる旨の通達が届く。その最終脱出船が出航する深夜、ガイの野営する洞窟にクレアが訪れ、19世紀から続く紳士の名誉の移り変わりについて、彼の思うところを語り始める。このときクレアが熱心に述べるのは、民主主義が発展した未来の世界では、紳士は自身の名誉を守るためなら部下を敵に手渡すことも許されるだろうという持論である。

“And in the next war, when we are completely democratic, I expect it will be quite honourable for officers to leave their men behind. It'll be laid down in King's Regulations as their duty—to keep a cadre going to train new men to take the place of prisoners.” (449)

そして翌朝、クレアは部下を見捨てて最後の脱出船に乗り、命令なしに戦線から逃亡して、昨夜の持論が自己弁護にすぎなかったことを自ら明らかにする。後にこの裏切りを知ったガイは元上官に相談するが、軍の上層部とも繋がりのあるクレアを軍法会議にかけると手引きをするのはよくないと口を濁される。紳士たる士官の背信行為がまさにその士官たちの手により黙認されていく経緯を、ガイは目の当たりにするのである。

加えてその直後、独ソ戦の開始を機に共産国家ソ連が連合国に加盟したという情報が伝えられる。強力な国家との同盟にイギリス人たちは喜ぶが、ガイ自身はそもそも全体主義を奉ずるソ連と戦うために軍に入ったのであり、その目的は仇敵と自国とが同盟を結んでしまうという事実の前に雲散霧消してしまう。それはガイにとり、祖国が自ら国の名誉を汚したに等しい背信行為である。友人からも国からも裏切りを受けた彼は、クレアを告発する証拠となる軍令のメモを焼き捨てる。それはガイの1939年から約二年にわたる軍隊生活の意義を決定づける事件として、次のように要約されている。

Now that hallucination was dissolved, . . . and he [Guy] was back after less than two years' pilgrimage in a Holy Land of illusion in the old ambiguous world, where priests were spies and gallant friends proved traitors and his country was led blundering into dishonour. (468)

さらにこれより前、クレタ島でガイは作戦中に立ち寄った集落で、二人の現地の少女たちに案内されてイギリス兵士の遺骸を発見している。ガイは少なくともその兵士の認識票だけは遺族に返還すべきだと思い、手紙を陸軍本部へ送ろうとするが、最終的にはそれにも失敗してしまう。

この兵士の遺骸を前にした少女二人とガイの構図は、キリストの死を看取る二人のマリアと使徒ヨハネと同じ構図である。無名兵士の様子は“*This soldier lay like an effigy on the tomb – like Sir Roger in his shadowy shrine at Santa Dulcinea*” (434) とも描写されている。しかし彼がいくら聖者に喩えられようと、その聖性はすでに力を失ったものとして読者に突きつけられる。なぜなら上述したとおり、現世における無名兵士の名誉回復＝キリストの復活は成らずに終わるからである。

このようにガイはクレアの背信を裁くことも、外地で孤独に戦死した無名

兵士の名誉を回復することもできず、結果としてミノスのごとく厳正な審問官の役目を果たすことはできなかったのである。このアンチクライマックスが『士官と紳士』の大詰めである。このアンチクライマックス・エンディングについて考察することで、本論のまとめとする。

## V. まとめ

ウォーの作品に見られるアンチクライマックスの特徴については、批評家 スティーヴン・トラウト (Steven Trout) が次のように指摘している。

Taken as a whole, the trilogy offers an impressive panorama, its “theatre of operations” ranging from London to Africa, from the Hebrides to Yugoslavia, but the trend in most scenes is toward the miniature, the collapse of seemingly gigantic events or profound historical moments into small-scale farce. (128)

このように、ガイだけでなく自作の主人公たちを常に伝統的英雄と比較し、事実を笑劇へと変換するウォーの手法については、ジョージ・マッカートニー (George McCartney) も、“They [Waugh’s protagonists] constitute an antithesis to the classical hero whose place in the world was established by his carefully memorialized ancestry, his personal reputation, and his determination to achieve his destiny” (94) と述べ、ウォーの作品には初期から後期に至るまで常に伝統的英雄に対するアンチテーゼが横溢していると分析している。

『士官と紳士』において、複数のエピソードの集積によりミノスに見立てられているガイのストーリーもこの事例のひとつである。古代国家の元首であるミノスはひとつの英雄像になり得るが、二十世紀の一般人であるガイ

は、高貴な女性に心を寄せられ、審問官の役割を与えられたとしても、その結果はことごとく受け身になるか失敗するかの道しかない。その運命に向かって彼を先導していくのが、『士官と紳士』に登場する犬達の役目である。それも、神話に登場する恐怖の怪物たちと比べれば、外見も中身もはるかに劣った犬、あるいは犬に擬せられた人間たちである。

『士官と紳士』では、戦時の英雄が新聞社により作られた広告に過ぎないことが語られる。ガイの友人、空軍の報道担当官であるイアン・キルバノック (Ian Kilbannock) は、第一次大戦でもてはやされたルパート・ブルック (Rupert Brooke) 達とは逆に、第二次大戦の英雄はもっと卑近な労働者階級から見出されるべきなのだという (329)。一見これは、戦争文学がより民主主義的な方向へと進むポジティブな見方と思われそうだが、先にも述べたウォーの作品意識では、人類がより退化していく過程の一部なのである。イアンはさらに次のように言う。

“This is a People’s War,” said Ian prophetically, “and the People won’t have poetry and they won’t have flowers. Flowers stink. The upper classes are on the secret list. We want heroes of the people, to or for the people, by, with and from the people.” (329)

このように、詩人や華のような高貴な存在はもはや現代の戦争においてはあり得ないという意識は、『士官と紳士』の中で、クレアのような登場人物にも象徴されている。

クレタ島にてケルベロスになぞらえられた三人の軍人は、どれも紳士たるべき士官の座からは転落した人物である。そのようにウォーは、質の低下は人間だけでなく、それに従う犬においても同様であると告発しているのである。二十世紀の戦争は、そのようなまやかしの英雄と卑俗な犬達が跋扈する荒地へと変容したというのが、『士官と紳士』を書いた時代のウォーの諦

念である。再度ロスを引用すると、“Thus Guy, who because of his age and personal inclination has trouble enough fulfilling any heroic purpose, is faced also with the fact that the heroes of the modern age are the products of puffery” (22) という指摘のとおり、ガイが心身ともに打ちのめされる形で現代の戦争のまやかしを理解する経緯が、『士官と紳士』の物語なのである。

しかし、もしここで物語が終わっていたとしたら、『士官と紳士』は、単純に神話時代と比較した現代社会の荒廃を見出す小説という、ウォーの過去作品の枠を超えられないもので終わっていたことだろう。現実にはウォーは、『士官と紳士』を出版してガイの物語を完結させるつもりでいたことがわかっている。それはナンシー・ミットフォード (Nancy Mitford) 宛ての書簡 (1954) にて彼が、『士官と紳士』のことを “It [*Officers and Gentlemen*] . . . completes the story I began in *Men at Arms* which threatened to drag out to the grave” (*Letters* 492) と言っていることから確認できる。

だが六年の後、ウォーは三部作の完結編として、『無条件降伏』を書き上げた。シヴィル・コノリー (Civil Connolly) は『無条件降伏』が出版された直後の書評で次のようにウォーの言葉を引用している。

Mr. Waugh writes: “In 1950 I [Waugh] wrote of ‘Officers and Gentlemen,’ ‘I thought at first the story would run into three volumes. I find that two will do the trick.’ This was not quite candid. I knew that a third volume was needed.” (430)

また、『パリ・レビュー』 (*Paris Review*) に掲載されたインタビューでも、ウォーは “It [*The trilogy*] changed a lot in the writing. . . . The third volume really arose from the fact that Ludovic needed explaining” と、第二部を書いた後で三作目の必要性が現れたと言っている (“Evelyn Waugh, *The*



Art of Fiction No. 30<sup>2)</sup>). それは個々の登場人物をもっと掘り下げねばという意識もあったが、何よりウォーがより高い志をガイに与えたかったからとも考えられる。『士官と紳士』の最後で祖国に絶望したガイは、『無条件降伏』において現実の名誉や栄光よりも高い存在を求めるようになる。その際に彼が帰りのつのが、カトリックである実父の存在である。三部にてガイは父から託された言葉を胸に、カトリックの魂である慈愛の心を、戦時中はどう発揮するか重点を置くようになる。

つまりは、過去の遺物である騎士道精神と古代の英雄像を、一度現実の戦争体験により戒い落とすために、『士官と紳士』における戦争描写があったのだと考えられる。イギリスを守る戦士としても、異教徒の英雄としても、神話の審問官としても役割を全うできなかったガイは、その後市井の一キリスト教徒として生きることを選ぶ。犬の表象は、それに至るまでに大戦中のルグリームとして戦場を放浪する彼に与えられた、地獄めぐりの伴侶として注目することができる。この観点からすれば『士官と紳士』は、『名誉の剣』三部作の中で、主人公ガイと作者ウォーが、過去を脱却し現代を見つめるようになるまでの、重要な通過点に位置づけられていると見なすことが可能である。

#### 注

\*本論文は2013年12月22日、第八回日本英文学会関西支部大会（於・龍谷大学）における口頭発表を加筆修正したものである。

<sup>1</sup> ワインバーグ (Gerhard L. Weinberg) によれば、1941年5月20日から26日までのドイツ軍による空襲でイギリス軍は約一万六千人の死傷者を出し、最終的にはその四分の三の人数が捕虜となった。なお、ドイツ軍は戦いには勝利したものの、同じくおびただしい戦死者を出し、空路・海路から陸路による侵攻へと以降の戦術を切り替えた。その後独ソ戦が開始されるまでは、このクレタ島での勝利がドイツによる中東侵攻の足がかりとなる可能性もあったと考えられている(227-30)。

- 2 唯一、かつてガイが住んでいたイタリアの居城で、地下室から逃げ出した牛が捕まって再度押し込められたというエピソード (325) が語られるのみである。確かに地下の牛とは迷宮のミノタウロスを想起させるモチーフであるが、これ一つだけをもってクレタ島という土地を登場させる布石、あるいはウォーのアイロニカルな現代批判の象徴とするのは不適切と思われる。
- 3 ヒースはマッグ島の領主の飼う犬を “infernally brutish” (Heath 229) と解釈し、領主の存在はクレタ島の地獄の予兆だと評しているが、犬の数から予想される怪物の存在までは明かしていない。またヒースの論は『士官と紳士』全体に、ギリシア神話にとどまらない古典文学の影響を読み取るものである。本論はそのうち、特にギリシア・ローマ古典文学に焦点をしぼり、ガイをクレタ島のミノスに見立てているという解釈を中心としている。
- 4 次作『無条件降伏』にてガイよりも早く出世の道を歩んでいたルドヴィクは、ハウンドの殺害がガイに知られているのではないかと危惧し、ガイを戦場へ送り込もうと画策する。だがガイが生還し戦争も終わると、ルドヴィクは一転ガイに譲り寄り、ガイが手放したイタリアの邸宅を譲り受け、そこに住むようになる。このようにルドヴィクはガイに、二・三部を通してつきまとい、運命を左右しあう関係になる。

#### 参考文献

- Connolly, Civil. Rev. of *Sword of Honour*, by Evelyn Waugh. *Evelyn Waugh: The Critical Heritage*. Ed. Martin Stannard. London: Routledge & Kegan Paul, 1984. 430-33. Print.
- Gallagher, Donat. “Guy Crouchback’s Disillusion: Crete, Beevor, and the Soviet Alliance in *Sword of Honour*.” *A Handful of Mischief: New Essays on Evelyn Waugh*. Ed. Donat Gallagher, Ann Pasternak Slater, and John Howard Wilson. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2011. 172-219. Print.
- Heath, Jeffrey. *The Picturesque Prison: Evelyn Waugh and His Writing*. Kingston: McGill-Queen’s UP, 1982. Print.
- Homer. *The Odyssey*. Trans. Robert Fitzgerald. London: Everyman’s Library, 1992. Print.
- Loss, Archie K. “History and Myth in Waugh’s *Sword of Honour*.” *Postscript: Publication of the Philological Association of the Carolinas* 6 (1989): 48-57. Print.
- McCartney, George. *Confused Roaring: Evelyn Waugh and the Modernist*

- Tradition*. Bloomington: Indiana UP, 1987. Print.
- Ovid. *Metamorphoses*. Trans. Mary M. Innes. London: Penguin, 1955. Print.
- Trout, Steven. "Miniaturization and Anticlimax in Evelyn Waugh's *Sword of Honour*." *Twentieth Century Literature*. 43. 2 (1997): 125-43. Print.
- Virgil. *The Aeneid*. Trans. W. F. Jackson Knight. London: Penguin, 1956. Print.
- Waugh, Evelyn. "Evelyn Waugh, The Art of Fiction No. 30." Interview by Julian Jebb. *Paris Review* Summer-Fall 1960. 21 Mar. 2014. Web.
- . *The Letters of Evelyn Waugh*. 1980. Ed. Mark Amory. London: Phoenix, 2009. Print.
- . *The Sword of Honour Trilogy*. New York: Everyman's Library, 1994. Print.
- Weinberg, Gerhard L. *A World at Arms: A Global History of World War II*. New York: Cambridge UP, 1994. Print.
- ミスチン, ロザリンド編『スコットランド史—その意義と可能性』, 富田理恵, 家入葉子訳, 東京: 未来社, 1998年.